



〈書評〉竹岡敬温著 『近代フランス物価史序説 : 価格革命の研究』

山瀬, 善一

(Citation)

国民経済雑誌, 132(1):104-107

(Issue Date)

1975-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00171909>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00171909>



書 評

竹岡敬温著

『近代フランス物価史序説』

——価格革命の研究——』

山 瀬 善 一

I

貨幣経済の下における経済・社会生活の理解にとって、物価史の研究は基本的なものであることは言うまでもないであろう。しかし統計的資料の欠如している時代では、その研究は資料的に大きな障害をうける。さらに、この研究は複雑な貨幣制度を基礎とするので、忍耐強い、地道な研究を必要とするであろう。まして外国の物価史研究ともなれば、なおさらのことである。

大阪大学経済学部竹岡敬温氏は、日本の物価史に多大の関心をよせておられる宮本又次先生のご指導の下に、早くからフランスの物価史の研究を進められてきた。とくに第二次世界大戦後のヨーロッパ学界の動向をうけいれて16世紀の価格革命の再吟味に専念され、いくたの好業績を発表され、一書に纏められる日が待たれていたが、ついに49年春「近代フランス物価史序説——価格革命の研究——」として公刊をみるに至った。

著者の発想が16世紀の価格革命の再吟味にあったところから、本書の構成もそれにそって、第1部では、問題提起と以下の準備的考察を意図した「価格革命の若干の問題」が、そして第2部での「フランスの物価」も、第3部での「フランスの貨幣」もつねに価格革命再考への志向が中心課題となっている。書名に序説という用語を付加したのは、価格革命の時期が近代物価史への出発時に該当していることからであろう。

以下、許された紙数の範囲内で、わたくしの関心を惹いた若干の点について言及することにしよう。

第1部の「価格革命の若干の問題」では、まず価格革命についての最近の動向をふまえた解釈がなされる。価格革命の主原因として、従来新大陸からの貴金属の流入を重視し、貨幣数量説による解釈がなされたのに対して、第二次世界大戦後人口増加の物価に対する意義が重要視されてきている。著者はこの2つの要因をつぎのように位置づける(第1章、第2章、第4章)。すなわち貴金属の流入については、その量は明確ではな

いが、当時の経済状態からみて貨幣数量説による物価の説明はあながち否定できないとし、他方人口については、物価ないし賃金が均一に変化していないので、相対価格が問題であり、農産物価格、地代が工業物価格、賃金より先走って上昇したことからこの面において人口圧の影響を認める。さらに、農産物と工業物の相対価格およびインフレーション進行期における資本費用ラグを顧慮する見地から、工業利潤増大への賃金ラグの影響を強調したハミルトン・テーゼを批判する（第3章）。当時の経済状態からみて適当な見解と言えるであろう。ついで、第2部における物価動向の実証的究明への1つの技術的問題、すなわち物価を貨幣の名目単位であらわすか、等価貴金属重量の換算であらわすべきかを論じる。初期の物価史研究者たちは、物価を等価貴金属重量の換算であらわす方法を研究し、1930年代に組織された国際物価史研究委員会もこの方法を採用した。ところが、その後長期または国際比較は別として短期の物価についてこの方法を用いることに疑問が提示され、当時一般に使用されていた貨幣単位の名目額、すなわち計算貨幣で表示することが適当であるとされるに至った。著者もこの方法に従って第2部での物価動向の実証的探究に進む（第5章）。

第2部では、第1部で明示された価格革命についての著者の考えにそって、その解明に役立つ諸要素の実体を実証的に確認することにあてられている。まず、物価について、各地の利用可能な時系列資料に統計的処理を施し、その長期トレンドと短・中期循環変動を図示することに努める。穀物を中心に、場所によっては、その他の若干の食料品をも含めて、フランス全体にわたって適当に選ばれた拠点地（パリ、ドフィネ、ドゥエ、トゥールーズ、オルレアン）をとり上げ、個々に吟味し（第6章、第7章、第8章、第9章、第10章）、さらにこれら拠点地相互の比較を行なう（第14章）。

ついで、ごく限られた場所についてはあるが、賃金と地代の動きについて（第11章、第12章）、さらに人口増加と穀物価格との関係について（第13章）実証的に検討する。そして最後に長期トレンドを短・中期循環変動と絡ませながら地域的の差違をも顧慮して物価の動向を綜観する（第15章）。16世紀前半における上昇波は、その原因を人口の増勢、イタリア戦争、貴金属生産および流入の増大に求める。ついで1540年代後半にはじまる世紀中葉の陥没期を経て起こる第二の上昇波の頂点を1590年ごろにおき、その原因を貴金属の流入のあらたな増加と宗教戦争に帰せる。この場合、貴金属の流入を物価騰貴の単なる外生的独立変数とみず、当時のヨーロッパの経済内部の事情が考慮される。貴金属ストックを経済の拡大に容易に結びつけえなかったこと、ならびに貨幣以外の支払手段が未発達であったことなどを経済的条件としている場合、貴金属の増大と貨幣相場の引上げが物価騰貴に直接影響をもったのである。

第3部では、著者は貨幣の側面から価格革命の解明への光を当てようとしている。貨

幣は実体貨幣と計算貨幣とに分けうるが、歴史的には計算貨幣が価値尺度の機能を果たし、実体貨幣が支払手段としてのみ使用された時代があり、16世紀はまさにこのような時期であった。したがって、著者は実体貨幣については「貨幣制度と貨幣鑄造」(第16章)で詳論し、計算貨幣の性格と機能については「計算貨幣制度の意義」(第18章)で取り扱う。16世紀は、流通経済が大いに進展する時であるが、これに対応して貨幣相場の変更とか、計算貨幣のもつ特殊な機能の乱用とかが経済的弊害をもたらした時でもある。それ故、マレストロワー-ボダン論争を焦点として貨幣論争が活発に展開された。こういった事情を貨幣相場の変更(第17章)、計算貨幣制度の廃止(第20章)、貨幣・物価論争(第19章)として詳しく検討している。最後にフランスの貨幣的景況を国際商業、新大陸からのスペインへの貴金属の流入トレンド、国際・国内情勢および国王の貨幣政策などに関連させて述べている。16世紀中葉にはフランスは貨幣危機を経験するが、しかし大西洋岸諸港は相対的に独立した活発な国際商業を営んでいたため、この危機に対しては独自の姿を示すことを指摘する(第21章)。

II

さて、本書について若干の感想を述べることにしよう。

ヨーロッパにおける物価史の研究は、1930年代にすでに国際物価研究委員会が組織されるほどの関心をもたれてきたが、第二次世界大戦後に数量史的研究のめざましい発展に呼応してこの分野もいっそうの刺激をうけた。竹岡氏の著作も数量史的研究の手法を用いたはなはだユニークなもので、時系列資料に統計的処理を施すことによって短・中期循環変動と長期トレンドの把握に努めている。

物価史の研究は、物価史のための物価史に終始していることも多いが、著者の発想が価格革命の再吟味にあるので物価にかんする諸要素の検討に及んでいる。この意味ではいわゆる技術的な物価史以上のものであり、経済史への多くの結びつきについて貴重な示唆がなされている。時代により異なるとはいえ、経済史にとり物価史は極めて重要な役割を果たすものであることは言うまでもないが、物価史を専門にされている著者であればこそ経済史の中での物価史の位置づけについて積極的な見解をお聞きしたかった。

本書は数量史的研究の手法を十分にとり入れているとともに、随処で経済理論を適用しており、経済史の最近の動向をふまえた納得のゆくものである。経済理論の適用には、適用条件が充たされていることが必要である。16世紀の政治・社会・経済的環境をふまえて貨幣数量説、ハミルトン・テーゼなどを吟味しているのは当をえたものと思う。ただ欲を言えば、この時代のフランス国内の貨幣経済の在り方に触れてもらいたかった。貨幣経済が現在のように万遍なく浸透していた訳ではないので、物価騰貴の生活への影

響はその浸透度によって大きく左右されるからである。著者は貨幣的景況としてフランス全体としての貨幣量を問題としているが、これは必ずしも貨幣経済の浸透度を示すものではない。

価値尺度としての機能をもつ計算貨幣について詳論されているが、つぎの点は明確にしておくべきではなかろうか。すなわち、価値尺度としての計算貨幣の価値はどのようにして決まるものであるのかということである。H. ファン・ウェアフェーケ (Van Werveke) は、中世末期について過去の好評をえていた実体貨幣の価値が、その鑄造停止後においても継続していると主張しているが、もちろん国王の意志によって任意に定めることもありうる。16世紀には後者に移行していたと見做すべきか。さらに歴史的貨幣の特色の1つである二元性すなわち本位貨幣と補助貨幣の関係の遮断が、この時代にはどのような事情にあったかも触れてもらいたかった。

本書へのわたくしの感想の中で、いくつかの注文をつけたが、これはあくまで蛇足的意味のものにすぎない。本書は、16世紀フランスの価格革命の性格ならびに貨幣制度について、その研究方法と視野においてわが国では先例をみないユニークなものであり、この方面の研究者に限らず広くヨーロッパ近世初頭に関心をもつ者の必読の好著と言えるであろう。

(昭和49年3月、創文社刊、A5判、311ページ、4,500円)